

居場所のない子どもと共に

ルカによる福音書 18 : 15 - 17

18:15 イエスに触れていただくために、人々は乳飲み子までも連れて来た。弟子たちは、これを見て叱った。18:16 しかし、イエスは乳飲み子たちを呼び寄せて言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。18:17 はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

子どものように素直になること。このことがここで勧められている。そのように理解して間違いはないでしょう。けれども、これまでルカによる福音書を読んできた文脈の中においてみると、ここにはそれだけではない、子どもというものをもっと突き詰めて見る、そこから見えてくる非常に大切なことがあるのです。

これまでルカによる福音書は「神の国」ということをテーマにしてきました。ここでも17節にあるように、神の国が引き続きテーマになっています。これまでに分かったこと。それは神の国はイエスと共にあるということでした(2:11, 2:29-30, 4:21, 11:20, 17:21, 23:43, その他多数)。そしてイエスは苦しむものと共にある。神の国=イエス=苦しみ、この三つが一体となって、ルカによる福音書を貫く軸となっています。

さてこの観点で今日の箇所を読んでまいりますと、子どもというものが単に素直な存在であるだけではないことが分かります。聖書は子どもを単に純粋で可愛い存在とは見ていません。出エジプトの嬰兒殺し、飢えた母親らが子どもを食べた話、イエス誕生の時の幼児虐殺、そしてイエス自身も誕生のときに居場所のない子どもでした。聖書では子どもは苦しむ存在として描かれています。

イエスのそばに来ようとした親子が、弟子たちによって追い払われた。大変残念な話ではありますが、残念といっているのは男性の価値観でしかないのかもしれませんが。母親にしてみれば、これは悲しいこと、胸が張り裂けるようなことではないでしょうか。結婚し子どもを生んで、愛に満ちたクリスチャンホームを夢見て、赤ちゃんを伴って礼拝に出席したときに、その泣き声を嫌がられる。「母子室に行け」と言われる。どんなに悲しいことでしょうか。傷つく親を、その苦しみを、幼子は同じように感じます。

私が子どもの頃、片足がない障害者の父は、ある自動車工場に改造車を作ってもらい(当時はオートマチック車はありませんでした)、それを運転していました。あるときその会社の社長さんが家に来て、話し合いをしていました。すると父は、「若い従業員が自分を馬鹿にする」と、大声で怒りだしたのです。その時私は、父が傷ついていること、世の中から差別されていること、それをこのような形で抗議せざるを得なかったことを知りました。そして私自身も傷つき、苦しい気持ちを抱えたのです。

皆さんも子どもの頃を思うと、大変苦しいことがおありだったのではないのでしょうか。周囲の大人から見ればたいしたことではないようなことも、子どもにとっては一大事、たいそう苦しい思いをしているのです。お母さんがいなくなっただけで、もう人生の終わりのような恐怖を感じます。今はあんなことで大騒ぎする事はなかったのだと思うにしても、その時感じていた事は大きかったのではないのでしょうか。子どもとは、大人よりも経験もなく無防備ですから、苦痛も強く感じる存在なのです。子どもとは弱者であり、弱者の苦しみを強く感じる存在なのです。

皆さんは、大人になった今も、時に、非常に傷つき苦しむことがおありなのではないのでしょうか。心理療法の世界でよく言われる事は、今の苦しみは子供の頃の記憶だということです。最近一般でもよく言われるようになった「トラウマ」というものです。子どもの頃に一旦植えつけられた感情は

生涯消えません。ですから幼いときに傷ついたときの苦しい感情は、それを思い出させるような状況に出会うと、理性を制して、表に出て来て、まさに今その傷つきの場面が起こっているかのような錯覚を起こさせるのです。大人になって経験する苦しみは、実は、子どもの頃の記憶なのです。

イエスは、子どもの居場所のない苦しみに寄り添いました。けれどもそれは、子どもだけではなく、子どもの頃の所在無さを今経験している大人にも、寄り添っていかざるということです。子どものようになるということは、純粹で素直になるということでもあるでしょう。けれども、その更に奥深くには、今の苦しみを、子どもの頃に体験したあの苦しみ、追い払われた苦しみ、居場所のない苦しみ、存在を無視される苦しみとして再体験すること、つまり、子どもの頃に体験した弱さを再体験することに他なりません。しかもそれを、イエスの前で、神の前で、つまり祈りの中で、イエスの寄り添いを感じながら、再体験する。苦しみを、主の手に委ねながら、あたかも大切なものででもあるかのように十分に味わう。主と共に味わう。そこに神の国ができるのです。幼子のように神の国を受け入れるとはそういうことです。そして教会はお互いの苦しみに寄り添う共同体です。